

「永遠」

〈はじめに〉

この世に絶対の関係など存在しない。

これがこの本を読んだ私の結論だった。この「舞姫」という話が私たちに教えてくれていることは、いつの時代も人と人との絶対の関係などなく、いつかは何でらかの理由で途切れてしまうものだという事だと、私は思う。だから期待したり、望む事は意味がない事だと…。また、私がこの結論に至った背景には、この話だけでなく、私自信の過去も影響している。高校生という子供から大人への移り変わりの大きな時期に、私が強く「絶対の関係などない」と思った事もあり、今回この事について書きたかった。

〈本論〉

人と人との間において絶対と呼べる関係などこの世にない。ここでいう「絶対」とは「永遠」という意味だが、私は永遠に続く関係などないと思っている。いきらお互いが愛し合っていたとしても、その関係が一生続くという保障はどこにもない。今回の「舞姫」からそれがひしひしと伝わってきた。本文に「余が彼を愛づる心のにはかに強くなりて、ついに離れがたき仲となりしはこの折なりき」、「捨て難きはエリスが愛」、「この間余はエリスを忘れざりき」とあるように、豊太郎はエリスの事を心の底から愛していた。それに加え、エリスのお腹の中には二人の子供がいたのだから、これから先は共に生きていくという二人の人生のストーリーが最も普通であり、そうなるべきであろう。

しかし豊太郎は違った。自分の名誉と地位をエリスよりも優先し、日本へ帰るという結論によってエリスを裏切った。たしかに、豊太郎が眠っている間にいろいろな出来事が一気に進んでいったため、裏切ったわけではないという考えもできるが、ではなぜ友人の相沢や大臣に対して、断らなかったのだろうか？もし本当にエリスの事を愛していたのなら、断るはずだ。

また、本文に「君を思ふ心の深きを底をば知りぬる」、「我が愛もてつなぎ留めではやまじ。」とあるようにエリスの豊太郎に対する愛情がどれほど大きなものか知っていながら、豊太郎はエリスを裏切った。愛する人より何より自分の名誉を選んだ男だ。

豊太郎は「舞姫」の冒頭で次のようにも述べている。「人の心の頼みがたきは言ふもさなり、我と我が愛さへ変はりやすきをも悟り得たり。」あんなにも愛していた人への想いさえも、変わりやすく、人の心というのはあてにならない事を自分自身で自覚していた。絶対の関係などないのだ。

〈まとめ〉

ただ、一つ分からなかった事は、豊太郎はエリスへの気持ちを心変わりしたかどうかという事だ。本文では、自分は心変わりをした、と言っているが「浮き世の憂きふしをも知り

たり」というふうに後悔して辛く思っている。心変わりをしたというのなら、なぜ相沢をそこまで憎む必要があるのか。

冒頭で述べたとおり、私の過去の経験からしても、この世に絶対の関係などない。それは家族に対しても友達に対してもあてはまる事だ。いくらそれを望んだとしても、結局永遠に続くなんて保障はどこにもない。ただ…だからといって私自信その絶対の関係を信じていないわけではない。いや、むしろ信じたい。そうでなければ何を目的として、人との関わりを続けていけばよいか分からなくなる。永遠などないと断言してしまえば、人との関わりすら、私の中で無意味なものになってしまう。

また、もしも私の考える「この世に絶対の関係などない」という定義にのっとなって人生を歩むとしたならば、それを覆すような生き方をしていきたい。これからは、永遠という名の絶対の関係を築ける人と共に生きていきたい。